

育児院だより

2025年3月10日



第89号



発行：社会福祉法人 児童養護施設 埼玉育児院

〒350-1175 埼玉県川越市大字笠幡 4904-1

発行責任者：藤井美憲 編集：埼玉育児院広報委員会

Tel 049-231-2107

Fax 049-231-2111

「子どもたちの巣立ち」

施設長 藤井美憲

令和6年度も3月となり、終わりに近づいています。この時期は、子どもたちも職員もお別れと新たな出会いをする時期です。今年度、埼玉育児院では「激励会」（卒院する子どもたちを送る会）で、4名の子どもたちを送り出すことになりました。

子どもの自立は、親はみんな心配で、ちゃんと生活できるのだろうか、困ったときに対処できるのだろうか、と不安の中で見守りながら送り出すことになります。どんなにまじめでしっかりとした生活をしてきた子どもでも、その心配や不安はあります。親の心というものを思い起こし、自分のときもそんな風に心配してくれていたのだろうかと思います。

自分の自立を考えると、高校を卒業して、民間の会社に勤めながら夜間の大学に通い始めた時期を思い起こします。右も左もわからず、就職先での仕事を覚えるのに必死でした。新たな人々の中で、まじめに仕事に取り組みながら、新しい環境に慣れるのは大変だったことを思い出します。自分の場合は、良い人達に囲まれて、一人で生活する不安や孤独にはそれほど悩まされることはありませんでした。日々が慌ただしく過ぎていき、自分のやるべきことに集中していたので、悩む時間などなかったのかもしれない。働きながら、大学に通う生活ができるだけでも待遇がよかったのでしょうか。休みたいとか辞めたいとかということを考える余裕もなく、あっという間に時間が経っていました。

今から40年も前の話です。現在を生きる子どもたちは、不安や心配、孤独や寂しさをどのくらい感じるものなのでしょうか。いろいろと想像をめぐらしますが、困っているという印象があまりないのです。国は、児童福祉法の改正を進める中で、年齢制限をなくしたり、自立支援のための生活援助事業を新たに設けたりしています。子どもたちにとっては、相談をする場所も帰ってこられる場所も用意されるというように、子ども達の自立支援には力を入れています。社会の理解も進み、自立を支援するということが相応に共通認識が生まれているようにも感じます。そのような認識が子どもたちに社会的自立に関するイメージを変えてきているのかもしれない。

今年の2月23日、24日で児童養護施設や里親家庭などで暮らす中高生や支援者を対象に「ぴあ応援ふえす」がオンラインで開催されました。朝日新聞厚生文化事業団と同事業団とかかわりのある学生らでつくる実行チームが主催したものです。巣立ちのプログラムに関する意見交換、一人暮らしで大変なこと、友人関係のことなどを中心に語り合うイベントでした。全国から150人の応募があったそうです。

埼玉育児院でも、自立支援のための対応策を検討すべき時期がきたと感じています。これから自立しようとする子どもたちに、様々な支援を届けられるような取り組みを展開していくことが求められていると思います。